

概 要

セッション5では、日文研とともに本シンポジウムを主催したEast Rock Instituteがコリアン・ディアスポラ研究のための情報システムとして開発してきたKOCIS-KD(Korean Cultural Information System for Korean Diaspora)に関わる2本の報告が行われた。高全慧星「ディアスポラにおけるコリアンのアイデンティティの比較：KOCIS概観」は、論題そのものの比較研究よりは、報告者が中心となって提唱し開発を進めてきたKOCIS-KDが、コリアン・ディアスポラの比較研究にいかなる貢献をなし得るかという問題が中心となっている。報告においては、米・韓・日の諸研究機関における1960年代以降のKOCIS-KD開発史が概観された後、この情報システムが、(1)概念規定を精緻化し、(2)ディアスポラ—出身国—ホスト社会の三者関係理論の有効性の実証、(3)多様なディアスポラ社会における文化的差異の抽出、(4)個々のディアスポラに特有なデータの集積、(5)データ・クオリティ・コントロールなどの面で有効であることを実例を挙げつつ示した。

ダグラス・アヴィソン・ブラック「KOCIS-KD：コリアン・ディアスポラ情報集積のための1モデル」は、KOCIS-KDの技術思想について解説した。コリアン・ディアスポラのような比較研究においては、必要な情報をどのように集積し構造化するかが課題となる。KOCIS-KDは、「主題」「文化」「時代」「場所」「人」等の情報を集積したシソーラスを、複数のキーワードによって構成された多面的分類法を用いて縦断的に検索できるように設計されている。集積された情報は、チェックを通じてボトムアップ式に修正され発展し続けるものである、とされている。

KOCIS-KDをコリアン・ディアスポラ研究にどのように利用していくかという高報告と、KOCIS-KDの技術的問題について論じたブラック報告に対する質問・討論は両者あわせて行われた。必ずしも参加者の専門とは合致しない分野の報告であったが、参加者からは、例えば高報告に対しては、個別のディアスポラにおけるコリアンのアイデンティティを明らかにしようとする際、KOCIS-KDはどのような変数を想定しているのかという質問がなされた。また、KOCIS-KDが情報データベースとして、実際にどの程度の情報量を既に集積しているのかという質疑に対しては、KOCIS-KDは情報データベースを今後構築していく上での戦略的アイデアという性格が強く、KOCIS-KDの肉付けのためにも国際的な連携研究が必要であることが二人の報告者から再度強調された。

(松田利彦)